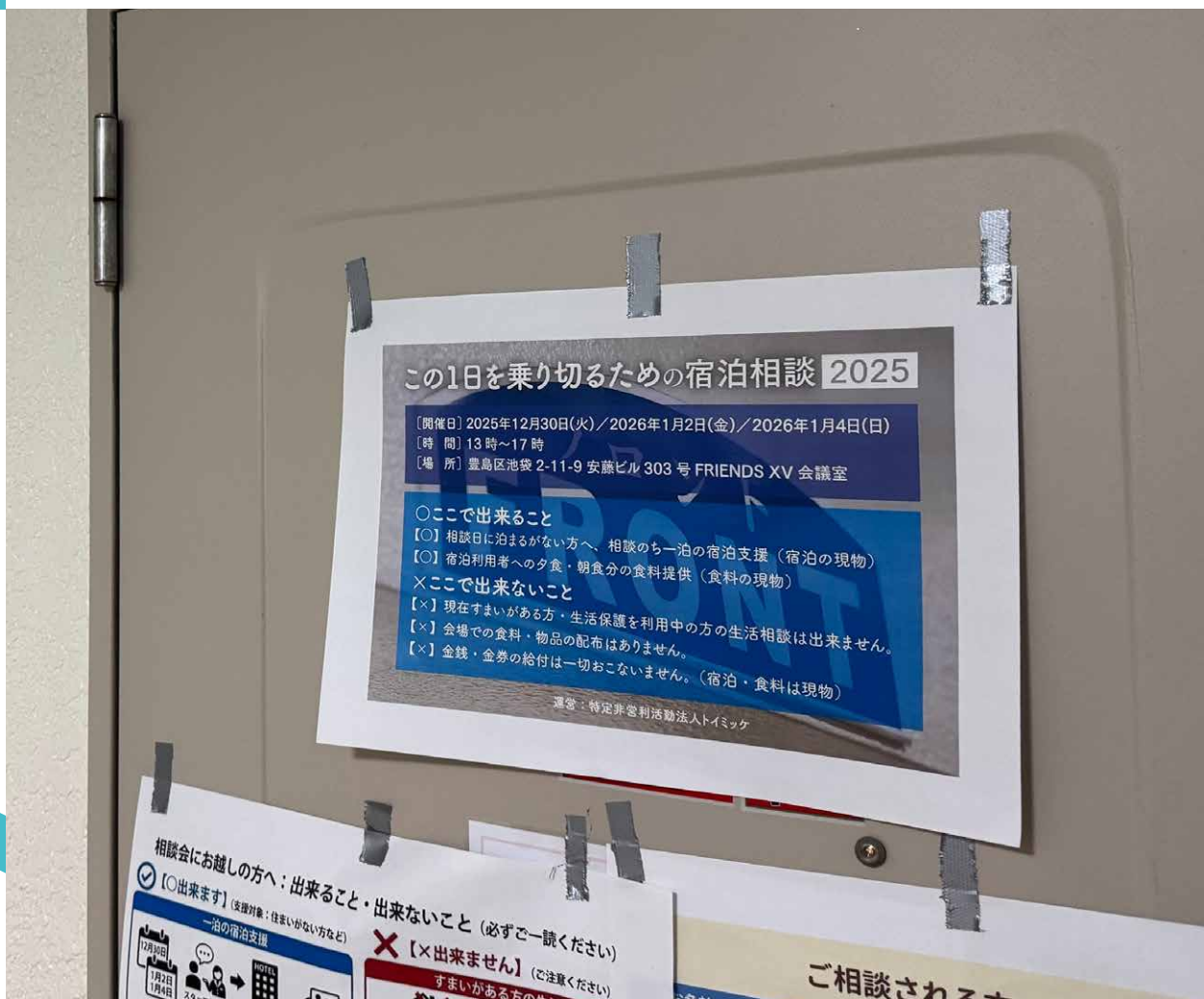
ANNUAL REPORT 2025-26

トイミッケ

NPO法人 トイミッケ 年次報告書 2025-26



代表理事あいさつ

トイミッケは設立から4年目を迎えました。今年も活動を続けることができたのは、寄付や助成、受け取りスポットの運営など、さまざまなかたちで力を貸してくださった皆さまのおかげです。まずは心からお礼を申し上げます。

2025年度は、私たちにとって大きな節目の年でした。緊急宿泊支援「せかいビバーク」を、つくろい東京ファンドから正式に引き継ぎ、トイミッケが責任を持って運営する体制へ移行しました。現場の支援はこれまで通り続けられた一方で、宿泊費や交通費などの負担を団体が直接担うことになり、財政面では厳しい一年となりました。運営の仕組みにも課題がありました。もともと「自分が動けば何とかなる」と考え、目の前の相談への対応を優先してきました。その結果、相談記録の整理や業務の分担、資金調達など、組織として整えるべきことが後回しになっていたと思います。

そんな中でも相談は増え続け、7月から10月末まで新規相談の受付を一時休止する判断をしました。継続して関わっている方への支援は続けましたが、新たなSOSに応えられなかったことは、今も心残りです。関係者の皆さまにもご心配やご負担をおかけしました。

一方で、受付を止めた期間は、事務局のあり方を見直す機会にもなりました。誰か1人の頑張りに頼るのではなく、複数の人で支え、無理なく続けられる体制をつくる。その必要性を、身をもって感じた一年でした。

住まいや仕事を失い、今夜の行き先に困る方からの相談は、決して減っていません。来年度は現場の支援と同じくらい、事務局の整備や財政基盤づくりにも力を注ぎます。SOSが必要なとき、いつでも助ける手が伸ばせるように。引き続き、皆さまと一緒に活動を続けていければ幸いです。



佐々木 大志郎
特定非営利活動法人トイミッケ 代表理事

2025年度「現場」で出会った4つのトピック

① 住まいを失う若者が、相談現場で目立っている

2025年度、「せかいビバーク」で出会う方の若年化が、いっそう目立つようになりました。相談者のおよそ半数が20代・30代で、なかには10代の方もいます。住まいを失った若者がいることは、支援の現場では決して新しい話ではありません。それでも、この状況に慣れてしまってはいけないと思います。

背景には、家計に余裕がない家庭で育ったことや、家族との関係が難しく実家を頼れないこと、最初の就職でつまずいたことなど、さまざまな事情があります。住む場所がなくても、スマホでスキマバイトを探し、日銭を稼いでネットカフェに泊まる。翌日の宿泊費のために、また仕事を探す。その生活を何か月も、時には何年も続けている方がいます。

路上で寝ていなければ、ホームレスとして数えられにくい。学校や職場、行政の窓口からも見えにくい。私たちが出会っているのは、これまで社会が十分につかめていなかった若者の困窮の一端なのだと思います。

② 「働きたい」のに、生活保護と就労の間でつまずく

「働きたい」「生活保護に頼らず自立したい」。相談者から何度も聞く言葉です。しかし、働き始めたことがきっかけで、かえって生活が行き詰まる方もいます。

たとえば、住み込みの仕事を転々としてきた方が生活保護を利用し、ようやくアパートに入居する。そこから仕事を探しても、通える範囲に希望する求人が見つからず、スキマバイトを始めます。ところが収入が月によって大きく変わり、保護費の減額や廃止と仕事が減る時期が重なると、家賃を払えなくなることがあります。結果として、再びネットカフェ暮らしに戻る。現場では、こうしたご相談が繰り返されています。

2026年1月、杉並区で家賃滞納をめぐる痛ましい事件があり、生活保護とスキマバイトの関係が報じられました。事件の個別の事情は分かりませんが、私たちも同じような不安定さに直面する方と日々出会っています。

必要なのは「働くか、保護を受けるか」の二択ではなく、不安定な収入でも住まいと生活を維持し、少しずつ立て直せる仕組みだと感じています。

2025年度「現場」で出会った4つのトピック

③ 仕事と住まいを求め、都市を移動し続ける人たち

地方の実家を出て、仕事を求めて東京へやって来る若者との出会いも増えました。ただ、東京が最終的な行き先とは限りません。寮付きの仕事に就き、退職すると住まいも失う。ネットカフェに泊まりながら次の仕事を探し、見つかれば別の都市へ移る。そんな暮らしを続ける方がいます。

2020年から関わっているBさんも、関東と関西を何度も行き来してきました。実家に頼れない若者も、日雇い仕事も、以前から存在します。変わったのは、移動と仕事の切り替えの速さです。スマホ一台で求人に応募し、日払いの報酬を受け取り、宿や長距離バスを予約できる。「今日は働けた」「今夜は泊まれた」を重ねながら、住まいのない状態が長く続いてしまいます。

一方、公的な支援は地域ごとの手続きを前提とし、申請や面談にも時間がかかります。その間に別の土地で仕事が決まれば、支援とのつながりが途切れることもあります。動き続ける人を、いまの制度が十分に支えられていないと感じています。

④ 家賃高騰で、住まいを取り戻すことが難しくなった

東京で住まいを取り戻すことが、以前にも増して難しくなりました。家賃が上がり、生活保護の住宅扶助の範囲で借りられる部屋が見つからない。不動産会社や保証会社の審査もあり、家賃の条件が合っても入居できるとは限りません。ようやく生活保護につながっても、そこからアパートに移るまで何か月もかかることがあります。

頼りにしてきた連携団体のシェルターも、空きがほとんどありません。民間のホテルやネットカフェの料金も上がり、今夜の宿泊場所を確保するだけでも支援費用がかさみます。「まず住まいを確保し、そこから生活を立て直す」というハウジングファーストの考え方を、現場で実践すること自体が難しくなっています。

かつて東京は、地方から出てきた人が、所持金が少なくても暮らしを始められる街でした。いまは、所得によって住める場所や選べる仕事が大きく分かれつつあります。「東京のシンガポール化」とも感じる変化です。支援の入口を増やすだけでは、解決できない住宅の問題が広がっています。



事業報告

あと一日をのりきるための宿泊支援

「今夜泊まる場所がない」。そんな相談に対し、ホテルやネットカフェなどの宿泊先を確保し、翌日以降の相談につなぐ支援を続けました。特に仕事や行政の窓口が休みになる年末年始には、12月30日、1月2日、4日の3日間、「この1日を乗り切るための宿泊相談」を開催しました。期間中は通常の「せかいビバーク」も動かし、合わせて延べ20泊以上の宿泊を提供しました。

相談に来るのは、必ずしも生活保護を望む方ばかりではありません。「次の仕事は決まっているが、入寮まで数日ある」「役所が開くまでの間だけ泊まる場所がない」という方もいます。実際に、次の職場が決まっていた方が連携団体のシェルターで待機し、無事に仕事先へ向かえたこともありました。

一泊の宿だけで暮らしが立て直せるわけではありません。それでも、寒い夜を安全に過ごし、翌日の仕事や相談に向かえることには意味があります。その後も連絡を取り、公的支援の申請や就労先への移動など、ご本人が選んだ次の一歩を支えました。

せかいビバーク

「せかいビバーク」は、今夜の寝場所を失った方が、街の身近な場所で緊急支援を受け取れる仕組みです。書店や店舗、団体の事務所などに、一泊分の宿泊、食事、移動、スマホの充電に必要なものをまとめた「緊急お助けパック」を置き、協力者の方に受付と手渡しを担っていただいています。

2025年度は受け取りスポットが68カ所となり、延べ786件の相談に対応し、新たに233人とつながりました。企業連携としてパルシステム東京・埼玉にも11カ所の拠点を設けていただき、うち7カ所で計12件の受け渡しがありました。その後の相談で、10代の若者が支援団体のシェアハウスに入居できた例や、行政窓口ですぐに対応してもらえなかった女性が、宿泊した翌日に公的支援につながった例もあります。

一方、相談の増加に事務局の体制が追いつかず、7月から10月末まで新規受付を休止しました。継続支援は続けながら、運営の見直しを進めました。市民の協力で「今夜」を支え、その後の相談までつなぐ仕組みを、無理なく続けられるものにしていきたいと考えています。





2025年度
せかいビバークの利用実績

新規利用者数

233人

相談対応件数

1,119件

受け取りスポット

68カ所

2025年は新たに233人の方とつながることができました。せかいビバークを利用する新規の相談が増加し、対応が追いつかなくなったため、7月1日から10月30日までの4か月間、新規受付を一時停止しました。なお、継続支援については従来どおり実施し2025年度は、一次対応から継続的な支援まで、団体全体で延べ1,119件の相談・支援に対応しました。このうち、二次面談・伴走支援は延べ786件でした。

前年度は新規利用者が338人、相談対応件数は延べ1,329件の実績がありました。今年度は数字としては減少しましたが、上記の通り新規受付を休止したためであり、支援を必要とする人が減ったわけではありません。実際、2026年3月には新規利用者が43人に達し、80泊以上の緊急宿泊支援を行いました。利用者の約5割は20代・30代で、40代まで含めると約7割を占めています。日雇いやスキマバイトで働きながらネットカフェなどで暮らす方、寮付きの仕事を転々とする方など、住まいのない状態は多様化しています。

若い「ホームレス」がいなくなったのではありません。路上で寝泊まりする人を数える従来の調査では、見えにくくなっているのです。私たちの支援実績は、その一端を示しています。

◉翌年度の速報値（2026年4〜7月）

新規利用者60人、継続支援を含め延べ144泊の宿泊支援を提供しました。

2025年度 会計報告

収入合計

約615万円

前年度の約2.3倍

収入に占める寄付金

71.3%

収入の内訳

項目	金額	構成比
寄付金	4,383,635 円	71.3%
助成金	1,706,836 円	27.8%
会費・その他	55,681 円	0.9%
収入合計	6,146,152 円	100%

支出の内訳

項目	金額	構成比
事業費	2,845,957 円	83.7%
管理費	555,500 円	16.3%
支出合計	3,401,457 円	100%

寄付に支えられた一年。
持続可能な運営体制が課題に。

2025年度の収入は約615万円となり、前年度の約272万円から大きく増加しました。特に寄付金は約53万円から約438万円へ増え、収入全体の7割を占めるようになりました。活動を支えてくださった皆さまに、心より感謝申し上げます。

支出は約340万円で、そのうち約284万円を事業費に充てました。事業費の約半分に当たる約140万円が宿泊支援費です。このほか、相談者のもとへ駆けつけたり、福祉事務所へ同行したりするための交通費、通信支援費などに活用しました。

一方で、宿泊費の高騰や相談の増加により、一人ひとりに必要な支援を続けるための負担も大きくなっています。また、決算上は黒字となりましたが、年度末には翌年度以降の活動に関わる前受金も計上されており、すべての資金を自由に使えるわけではありません。

今後は、緊急宿泊支援を続けるための資金に加え、相談対応を担う人員や事務局の運営費を安定して確保することが課題です。必要なときに必要な支援を届け続けられるよう、財政基盤と運営体制の整備を進めていきます。



トイミッケ

特定非営利活動法人 トイミッケ

〒170-0013 東京都豊島区東池袋1丁目17番11号
パークハイツ池袋1105号
※この住所にスタッフは常駐していません。